

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 呉 桐

【所属】 (助成決定時) 京都大学大学院・教育学研究科

【研究題目】 近代中国の「モダンガール」現象と日本モダニズム

【研究の目的】 (400字程度)

モダンガール現象は、20世紀初頭において、世界規模の商品経済と植民地主義の拡大を背景に現れたグローバルな共時的現象である。中国のモダンガールは、主として1930年代に租界をはじめとする都市部に出現した。それは一方では男性・資本・帝国の欲望を刺激したが、他方では多くの都市女性の憧れやジェンダ―意識の変化を表象するものでもあった。当時、大衆化しつつある女性誌においては、モダンガールの表象が大量に生産され、誌面にはコスモポリタンの傾向が著しく現れていた。しかし、こうした傾向に関して、これまでの研究では「西洋化」の側面に焦点を当てたものが多く、「日本」の所在を看過してしまった。

したがって、本研究は、モダンガール現象を分析対象として、1930年代中国都市部の女性文化とジェンダ―意識のあり様について、特に「日本」の位置づけに焦点を当てて実証的に明らかにすることを目的としている。この課題の解明は、中国/西洋の二項対立を超えたより重層的かつ複雑な文化構造を理解することにつながる。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究が分析対象とするのは、1930年代中国都市部の女性文化における日本モダニズムの受容である。当時のファッション誌や画報など女性の愛読する定期刊行物には、日本人女優や宝塚歌劇等をはじめ日本のモダニズム文化への関心が少なくない。対日関係が緊張化する時代において、この現象は注目に値する。

先行研究では、中国における日本のモダニズム文化の受容は、近代化を追求すると同時に、西洋をめぐる葛藤を緩和する機能をもつものだとされてきた。また、受容の過程において、「都会的日本」と「植民的日本」を区別する戦略が働いていたことを指摘する論もあった。しかし、それは女性文化の領域においてどの程度適用しうるか、検討する余地がある。

そのために、本研究は、1930年代中国の代表的な女性ファッション誌である『玲瓏』を主たる資料に、そのなかの日本表象を分析した。資料の選択基準として、刊行期間が長く、販売部数が多いという2点を重視した。具体的に、日本に言及した記事・図像(204件)を抽出し、分析を行った。分析軸は次の3点である。(1)日本の都市モダニズム文化を受容する際の主なルートを確認したうえで、(2)コスモポリタンの誌面における「日本」の表象され方、位置づけについて検討し、(3)特に日本の都市女性に向けていた中国側のまなざしがどのようなものだったのかを明らかにする。

研究を遂行するにあたり、(1)に関しては、転載元だと思われる同時代の日本の新聞・雑誌を精査するとともに、編集陣のネットワークや留日中国人留学生の文化活動に関する史料を収集・整理した。また、(2)(3)に関する分析作業は、女性の視点を重視し、女性編集者、女性読者による記事を活用した。補助資料として、『良友』画報、『婦人画報』、『甜心』、『女朋友』、『小姐』といった同時代の他の通俗的な大衆誌・女性誌を可能な限り収集・参照した。

【結論・考察】（４００字程度）

まず、日本の都市モダニズムに関する記事は、日本に滞在していた自費留学生によるものが多かった。そのネットワークにより、『玲瓏』をはじめ通俗的な女性誌のなかには、日本の近代的な側面への関心が広く存在していた。次に、日本表象の編成の論理について考察した結果、それはドメスティックな性格を色濃く持っていたことが明らかになった。1930年代における中国の通俗的な女性誌は、家父長制批判の潮流に乗って自由奔放なモダンガール像を多く創出していた。そうした中、ドメスティックな日本人都市女性、及び彼女たちのライフスタイルはしばしばマイナスイメージを帯びるものとなった。特に女性解放の意味を付与された西洋表象に比べると、国際的な文化秩序における日本の地位を低下させることにもつながった。

従来、日本に対する近代中国社会のまなざしは主に男性中心の外交史や文学研究の領域で論じられてきた。日本は、中国が西洋近代に追いつくための中間的標識だと位置付けられている。しかし本研究は、ジェンダーの視点から、日本のモダニズム文化を西洋のそれに対置させることで、中国の相対的な地位向上を図るという表象戦略の所在を明らかにし、近代日中関係の新たな一側面を示した。